魔の紅玉
ローズマリー外伝
母子堕落
空蝉
表紙／光星
試し読み版
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔の紅玉ローズマリー外伝　母子堕落』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『魔の紅玉ローズマリー　呪縛の花嫁』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

空蝉

表紙／光星

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ローズマリー

強大な力を持つ女吸血鬼伯爵。八十年以上も人が立ち入らない居城の主。

セリーヌ

魔力によって動く自動人形。ローズマリーの忠実な僕であったが、イメルダに操られてしまう。

イメルダ

人類の完全奴隷化を唱える過激派吸血鬼の一派。ローズマリーと反目している。

「さぁ皆様方。お待ちかねの、本日最後の出し物ですわ」

――オォォォォォォ！

銀髪の麗人、新男爵となったイメルダの宣言に、闘技場を埋め尽くした男たちから一斉に歓声が湧き起こった。

彼らの熱狂的な視線が集中する先。そこには、それぞれ対照的な二人の美女が佇んでいた。前方に押し出された女性は一目で分かる美貌と肉感的なボディの持ち主。ぴっちりと張り詰めた衣装から伸びる足は長く、しかしその足取りは酷く重いものだった。ボンデージ衣装に首輪を嵌められた娘は紫髪をかき分けて目隠しをされ、本来彼女の特色たる真紅の眸を覆い隠している。

後方の無機質な美貌のメイド服女性が首輪から伸びた鎖を握って、視覚を失った娘を強引に導いていた。

「それでは、取ります」

背後の美女――精巧に作られた魔力を動力に動く機械人形、セリーヌが抑揚のない声をそっと、前の娘だけに聞こえる声で耳打ちしてきた。

「くぅっ……セリー、ヌ……」

背中側を向いて呻いた彼女の美貌は、ひょっとして懇願の色を湛えていたのかもしれない。だが目隠しをされ、特色である紅の魔眼を覆われては表情のほとんどは窺えず、仮に

えっちシーン試し読み
ここから
スタート！

セリーヌがそれを感知したとして、機械人形が絶対的な主人の命令に背くことなどありえなかった。

体温を感じさせぬ腕が紫髪の後ろへ回され、うなじを滑って視界の戒めを振り解く。

「ふふ……それにしても、我ながらよくここまで調教できたものだわ。あの伝説の『紅玉の魔眼』を……ウフフッ、フフフッ！」

忍び笑いを漏らすのは、青白い肌と銀髪の女吸血鬼イメルダ。今や吸血種族の半数以上を纏め上げ、人間種の奴隷化を辣腕をもって推し進める冷酷な智謀の主。

実の兄であるベイリア、前男爵であった彼の代から続けられてきた淫蕩の催しは、爵位に妹のイメルダが就いた今でも、日を置かずに夜毎行われ続けている。兄と違い知略に長け、自らの女さえ武器に地位を築いてきた彼女にとって、この催しは同胞の士気を高める通例の儀式であり、従う者たちへの甘い蜜でもあった。

ふわりと夜空に目隠しの布が舞い、ついに今宵のメインディッシュである奴隷の正体が露わとなる。

「あっ、あぁぁ……こ、こんな姿を大勢の前で晒すなどっ……」

ボンデージ調の生地を押し上げる見事な肢体。かつて幾多の男に求婚を受けた美麗の女伯爵。かつて、『魔の紅玉』と同族からも恐れられた、強大無比な力の持ち主。紫髪と真紅の眸を備えた美麗の女ヴァンパイア、ローズマリー。

イメルダと違い人をむやみに襲わぬことを公言した魔の紅玉は、狡猾な男爵兄妹の策略に嵌まり、ついにはこのような性奴にまで貶められたのだ。かつては気を許した人間のみに呼ばせることを許した『マリー』の名で、今や数多くの同族から呼び捨てられる彼女の下腹部に、男たちの視線は集中していた。

「見ろ、あの腹ァ！　みっともねぇボテ腹だ」

「しこたま注いでやったからな。ひょっとしたら俺の子かもしんねぇぜ？」

「馬鹿野郎。ここにいる全員、あのオマ〇コにゃ百回以上中出ししてらぁ」

口々に下卑た笑みを浮かべ猥談に花咲かせる男たちは、全員が奴隷に堕ちたマリーの常連客。貴族でもなく、秀でた力もない。吸血種族の中でも最下層に位置し、身なりも薄汚れた彼ら全員が、今や魔の紅玉の媚肉を思う様貪れる特権にあずかっていた。

黒いボンデージ衣装をパンパンに押し上げる巨乳と、何よりも目立つ剥き出しのぽっこりと膨れた胎。日々淫らなショウの見世物として舞台に立ち、数えきれぬほどの同族と交わった結果が、誰とも分からぬ素性の男の子を身篭るという最悪の現実だった。

「む、無茶はよせ……もう、そろそろ産まれてしまう、からぁっ」

それでも自らの血を分かつ子を庇い、女ヴァンパイアが鎖を引くかつての部下へと懇願の眼差しを送る。すでに臨月に差しかかった剥き出しの下腹は常時の倍以上に膨れ上がり、いつ産まれてもおかしくはない。すでに堕胎もままならぬ状況なのだ。産むと決めた以上

は無事に生を受けて欲しい――彼女はいつしかそう考えるようになっていた。
「見えねぇぞぉ！　手ぇどけろぉ！　もっと近くにまで来いや！」
「くっ……」
遠くの客席から罵声が飛ぶ。男たちのあからさまな目つきにマリーは歯噛みして懸命に耐えた。この窮状を覆すだけの力は彼女にはもうない。歩くたびに揺れ動く妊婦胎を両手で抱えて、見世物として場内を歩き続ける。輝きを失った紅眼が伏し目がちに下がり、悔しさの余り噛み締めた唇からは薄く血が滲んだ。
客は皆、この日を待ちわびていた者ばかりなのだ。もしかしたら自分の種付けた子が伝説の吸血鬼の内に宿っているのかもしれない。女が産気づけば、その出産に立ち会えるやもしれぬのだ。どの男も眼を血走らせ、食い入るように身を乗り出してマリーとセリーヌを見つめていた。
「行っておあげなさい。種付けいただいた観客の皆様に、そのだらしないお腹を披露して歩くのよ」
「畏まりました、マスター。命令を遂行いたします」
主催者である女主人の命を受けて、無感情なメイド人形が手にした鎖を強く引く。
「や、やめよ、そんなにしたらお腹がっ……」
か細いその声は、聞き届けられることはなかった。引かれるがままに闘技場の縁を回る

哀れな供物。淫靡な見世物に成り下がった女吸血鬼に、容赦ない嘲りと侮蔑が浴びせかけられる。

「産まれたら、次は俺が種付けしてやる」

「んじゃあ、それまでは俺が尻穴を穿り回してやるよっ、ヒヒッ」

「ならば、私は小生意気な唇を。もっとも、最近は文句をほざくことも少なくなって、少々物足りぬ気もするがね」

四方から口々に浴びせられる罵声に、ヴァンパイアとしての誇りはズタズタに裂かれてしまう。むしろ、自分の中にまだそういった物がわずかでも残っていたことに、逆に驚きを禁じえなかった。

騒然とする場内をたっぷり半時間もかけ、無表情のセリーヌに引かれるがままにマリーは屈辱のボテ腹披露を行う羽目になった。

（あの連中の誰かの血を引く子供が、私の内にいる……。きっと、出来の悪い子供であろうが……それでも、私が守ってやらねばっ）

お腹の中で眠る小さな命に、罪はないのだ。きっと腹の子を立派に育ててみせる。場内でけたたましく野卑に吠え盛る男どもと同じにはならぬように――。

「そろそろいいわね。さぁ……ショウの開演。かつて我らの上に君臨したボテ腹奴隷と、心を持たぬ魔動人形の淫らな交わり。皆様方もお愉しみになって下さいな！」

二人が闘技場の中央へと戻ったのを見計らい、声高に冷たい音色が宣言する。それを受けまたも一斉に響いた歓声で、会場全体が大きく揺れた。百人は下らぬ観客の全てが今日この時、本日最後の催し物である最高の淫虐ショウを目当てにここに集まってきている。

「ご主人様。これより私のモノを、膣に挿入いたします」

人形との主従契約はまだ解かれてはいない、ゆえにセリーヌは未だマリーを主人と呼ぶのだ。囚われの身となってからもマスターキーを手にしたイメルダの声の届かぬ範囲では、かつてのようにミルクティーを淹れてくれたりもした。だが、今夜はその気心の知れた相手が凌辱の旗手なのである。

「や、やめよっ。赤ん坊がお腹に……！　だ、だから交わるのはダメぇぇっ！」

懇願を無視する形で、背後のメイド人形の腰がぴたりと鎖で繋がれし奴隷と密着する。シックなメイド衣装のスカートの奥で、本来彼女には備えられていなかった器官が、密かに脈打ち息づいていた。

敏感な体質のヴァンパイアは擬似男根の雁の形状、括れのサイズに至るまでをつぶさに感じ取ってしまう。

「感じておられるのですね。私の人工の勃起……外性器が脈打っているのを」

（くぅ……セリーヌの腰でドクドク蠢いてる、熱い……男のモノがぁっ……！）

人形の一部であるはずのその物体は、灼熱の欲望の如き体温を持って尻肉を擦りたてて

きた。ズリズリと熱棒で肉づきのよい尻を擦られれば、たちまちの内に背筋を快感が奔り抜ける。

「や、やめろっ。セリーヌぅ……そんなに擦っちゃ……擦ったらぁッ！」

「うふふ。はしたない女。人形に迫られて、あんなに腰をくねらせるなんて」

特設の専用席で見下ろすイメルダの声が、遠く離れていても人をはるかに卓越した女吸血鬼の耳には届けられる。その言葉に、初めて自分の腰が淫らにうねっていることに気づかされた。日々様々な淫靡の儀式を受ける中で、いつの間にか肉体が淫らに変貌を遂げてしまっていたのだ。

「体温上昇。鼓動も早まっています。ご主人様、興奮しておられるのですね？」

再度、メイド人形が無感情の声を耳元で響かせる。その言葉は残響のように幾度も胸の奥で鳴り響き、気高いはずのヴァンパイアの心中を掻き乱した。誇りを持った吸血種であれば、そのような問いに惑うこともありえないはずなのに。潤み始めた肉体の疼きを確信し耐えきれぬ悦楽にすがるように、とうとうぽつりとマリーの唇が動いた。

「か、感じておる……お尻ズリズリされて、股の奥から熱い汁が……汁が、漏れてきてるのぉっ……！　だ、だから、お願いだ、セリーヌぅ……」

「ご自分の口で、はっきりとおっしゃって下さい」

冷徹にも聞こえる人形の声。現主人であるイメルダを模したかと疑りたくなる冷たい響

きに、とうとう言いよどんでいた唇が最後の障壁を飛び越え、淫靡な言葉を叫んだ。
「マリーのヌルヌルの奴隷オマ〇コに、オシオキをぉっ……おっ、お願いだからオシオキしてくださいませぇぇぇぇぇぇぇッ！」
日々の調教で躾けられた台詞。いつもこの言葉を口にせねば、決して絶頂に至らせてはもらえなかった――。自ら奴隷宣言を行い、恥辱に満ちた心に絶望する。誇り高き紅玉の魔眼はくすみ、その代わりに被虐癖を植えつけられた、立派な牝奴隷となった女がそこには立っていた。
「浅ましい、惨めな女。魔の紅玉が聞いて呆れますわね。存分に嬲って差し上げなさい、セリーヌ。わたくしが仕込んであげた通りに、その牝を犯しなさい！」
「はい、マスター」
支配者の指令に頷き、セリーヌの腰が再び動き始める。尻の谷間をなぞり上げるように、衣装のパンツ部分をズリズリと硬い擬似男根が擦る。
「肉づきがよくて滑りやすいです。むっちりと張って……とてもイヤらしいお尻ですね」
「ふぁ、ぁぁ……硬いぃぃぃ……。熱いおちんちんがお尻を行ったり来たりしてるぅ……」
薄い生地越しに、灼熱の肉欲棒が脈打つのを尻肉で感じる。ただそれだけで、淫靡に花開いた牝の肉体は股の付け根から熱いジュースを噴き零してしまう。そしてそれは、間違いなく背後で密着する魔動人形にも知られてしまっているはずだ。

「敏感な身体。全て、毎日行われた性感開発、及び殿方との性行為を繰り返し実践してこられた結果です。順調に、ご主人様は牝奴隷としての完成に近づいておられます」
欠片もありがたくなどない、セリーヌの言葉。苦々しくその誹り――当人に、その気はないのだろうが――を甘受しながら。美麗の女吸血鬼は擬似男根との摩擦で得られる快楽に浸っていった。快楽に慣れた媚肉は、もはや一時も刺激なしではいられないほどに成り果てている。セリーヌの言葉自体に、微塵も嘘は含まれていないのだ。
「くぅ、も、もっと……頼む、セリーヌ。もっと、強くぅ……ズリズリしてぇっ……！」
証拠に、今もはしたなくおねだりの言葉を口走ってしまっている。どう心で抗おうと、開発され尽くした肉体はもうすでに堕ちてしまっているのだ。
一度壇上の指示を仰ぎ、それから改めてメイド人形は元主人であるマリーの懇願を聞き入れた。膝を曲げ、腰を押し出すようにしてその上にマリーの身体を乗せる。言わば、男根と密着する尻谷を基点とする形で、女吸血鬼は両脚ごと抱え上げられてしまった。
「これで、観客席にご列席の方々にもよく見てもらえますよ」
「うぅぅ……そ、そんなことぉ。そんなこと、知らぬ……ぅっ」
顔を背けた吸血鬼の表情が恥辱に染まっていたのを知ってか知らずか。両足を揃えて抱えられ、足首と豊満な尻肉だけでメイドに支えられた奴隷に、会場中から大歓声が沸く。
「ヒヒッ、まるでガキがシーシーさせてもらってるみてぇだなぁ」

「違いねぇ。もっともお漏らししてるのはションベンじゃなくエロいオツユだけどよ！」
セリーヌが腰を揺すれば、上に乗せられたマリーの熟した肢体もゆさゆさと揺れた。罵声と野次の飛び交う中、妊娠してから二回りはサイズアップした爆乳が、大きく上下に揺れる。ぴっちり密着したボンデージ生地の内側で、勃起した乳首が擦れあう。母乳を搾られ、散々弄くり回された乳肌は以前にも増して過敏にされてしまっていた。
「動悸加速中。……ご主人様のお好きなお乳は、後で好きなだけ搾って差し上げます。ですから今は、お尻で私の勃起ペニスを鎮めてください……」
「うくぅ、ふぁ……あっ、あぁぁ……！　わ、わかった、からぁっ……」
不安定な体勢で腹を庇い、息の乱れも直せぬ状況にも、奴隷の尻は淫らに振りたくられていた。感情がないゆえに一糸乱れぬ規則正しい律動を続ける魔動人形の腰使いに合わせようと、支えの擬似男根に無我夢中で腰を押しつける。
「あ、熱いの出てきたぁ……先走りのお汁、べとべとお尻噴き出してるのぉ！」
「くひひ、エロい台詞並べちゃってよ。聞いてるこっちが赤くなるぜ、売女め！」
会場の男たちから口々に囃し立てられる。だが、逐一言葉にして報告するように躾けたのは、当の観客たち、すなわちマリーの肉体を貪った男たちに他ならない。そのことに憤慨する気力も、無意識下で勝手に卑猥な言葉を漏らす心に抗おうとするプライドも、力を失った吸血鬼にはもう残されてはいなかった。

「くひぅ……くひぁ！　あぉ、ぉぉうぅン……！　お尻す、すごひぃぃッ」
べっとりと密着部分を濡らすのは、擬似男根からの先走りだけではない。ネトつく音に触発され、淫靡にくねる美尻を包むショーツの内からも粘ついた液が漏れていた。
妊娠してから粘度を増した淫蜜が、セリーヌの先走りと混じりあい、グチュグチュと泡立ち攪拌される。
「ありゃ高慢女のマン汁だ。だだ漏れだぜ。締まりのねぇマ〇コめ！」
「仕方あるまいよ。毎夜休みなく肉棒を突き入れていては、締まりも緩もうというもの」
男たちの嘲笑は調教によって淫蕩に捻じ曲げられた心に被虐をもたらし、より一層女吸血鬼の腰を揺すり立たせる。それが分かっているからこそ、彼らは大声で囃すのだ。
「お口をお開けになって下さい」
「や、やめぇ……ふむぅっ！　んぐっ、むぐぅぅぅンンッ！」
顎に手をかけ振り向かされた唇を奪われる。支える腕が一本減ったところで人ならざる自動人形の拘束力は変化しなかった。重なった唇をこじ開けて早速絡まる舌先に、自ずと奴隷の舌も吸いついた。
（また、またアレをされて頭をおかしくされてしまう……！　気持ちいいことしか、考えられぬ、変態奴隷に……）
想像だけで股間の湿りを増す、彼女のみが快楽を得られる行為。他の吸血一族の誰も、

そのような部位で悦楽を貪ったりはしない、吸血鬼の象徴ともいうべき部位への愛撫。牝奴隷は自らの意思でメイド人形の舌を口腔の奥へと招きいれた。
「ふぁむ、んぢゅっ……れろるぅ」
「むむうぅぅ……ん、んんぐぅっ……ひ、ひぁ……！」
途端、ゾクゾクと背筋を快感が奔り抜ける。緩やかで時折チクチクと針で刺されるような、もどかしい刺激。セリーヌの舌先は、下顎の右奥――『魔の紅玉』ローズマリーの誇りであった牙へと接着していた。
（牙弄られるのイイッ……ぞくぞくするのぉ……頭が痺れて、何も考えられなくなるぅ）
「本当。牙で感じるなんて貴女一人だけだわ。誇り高き一族にあるまじき変態さん」
イメルダの嘲りと冷たい視線を浴びながら、メイド服と密着した腰はより激しくくねらされる。片手で固定された身体がずり落ちる危険がないと知ると、さらに快楽を得るべく摩擦行為に没頭した。
「ぢゅ……ちゅぷぷぅっ、んぱぁっ……じゅるるっ」
丸めた舌先で牙の突端を扱かれ、あられもない嬌声を上げる。幾度もこうしてキスと牙愛撫を施されてきた経験から、顎を上向かせ刺激を受けやすい体勢を率先して取った。宙に浮いた脚がブルブルと小刻みに揺れる。白くきめ細かい美肌は上気してほんのり朱に染まり、快楽の度合を見る者に伝えていた。

「……っぷぁ！　はぁ！　ぁふ、ふぅぁぁぁぁ……もっとぉっ、もっと牙をシコシコしてええええ……ッ！」

「はしたない御方。そろそろ……私の方も限界のようです。……このまま、出させていただきます、ご主人様」

両脚と腰を胴に回した片手で抱え、セリーヌの腰が大きくグラインドを繰り返す。早められた律動に、抱きかかえられた無力な奴隷の肉体は大きく前後に揺すられた。

「ズリズリ、されるのぉっ、お腹に響く……ッ！　赤ん坊が、びっくりしちゃうぅっ！」

「出ます。熱い汁が、たっぷりと……牡の、濁液……！」

――ズリィッ！

一際大きく擬似男根で尻の谷間から陰門の割れ目までを擦り上げられ、奴隷の背筋がピンと仰け反る。背後のメイド人形もまた痙攣する腰を吸いつく美尻へと押しつけていた。

――びゅぷんっ……！　ぼびゅぶっ！　びゅりゅっ、びゅぐぶぶっぶぶぅぅ――――！

「ふわぁぁぁっ……お腹の下で、ドクドクして……おる、熱いせーしがびゅぐびゅぐ、爆ぜておるぅ……ッ！」

メイド衣装のスカートに染み出すほど大量に、密接する湿ったショーツにさえ感じられる熱い迸りを受け、互いに湿った着衣同士を擦れあわせグチュグチュと淫らな水音を奏でる。鼻先には本物と変わらぬ、濃密な牡汁の香りが漂ってきていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/